

はてんウーマン

1983.9.

No. 48.

連絡所 津田尚美

編集人 葛西よう子

長崎婦人問題会議 南佳

八月十四日
N.B.C.ホール

一婦人の地位の向上のために

主催 長崎県

「オレ部 講演」をきいて

津田尚美

講演は「これからの女性」 語り手は婦女子短大
教授 笹野貞子氏

「正史は人妻が求める方向に流れる」 今この流
れに女性はどうかわかなくて行こうとするのだろうか
正史を知るとその事は未来への展望の基となる
正史の中で女性は何を是とし何を強制されるか
てまじらうだろうか 母は元始古代 氏族社会
に於て血縁の価値観の母系社会の中心であった
そのあと継承の中をいかに生かされたい身分割 封
建制度時代から女性はその非合理性 機会
性の欠如で抱束され束縛されて行きた
今現代に向けるものは何か それは人間平等
であるという意識と文化の伝達である

それは協力するとは成り立たない社会である
又自分の存在なくしては協力出来ない事であ
る 人と人とのかわり方の内容を問われる時代
となった 以上の事を生き生きと語られる
その口調をみんなに知らせたい

何故か合赤服を着て来たか 観覧用女
性であったため媚で着た服じゃなく、私は
職業上みんなをいぬわたりさせるわけにはいかない
かと私は赤い服を着て動き廻る」 TVの「お
しん」と徳川家康の事を話の中に入れて「人
がたえのんですむ問題じゃない、一人の決定権
に惑ふ時代じゃない、その当時の生き方の一つ
が、現代に通用する問題じゃない」と言われ
た時は最近の話題の中で腹立たしく思いたが
り私自身の言葉不足など、もどかしさを感じて
いたのだ、その的確な言葉に頷きを下げる、た
自分の嫁姑の経験と語られ「その時は三三で
おうちやうけない、私は未来を展望する、これか
らの女なんだから、教える必要がある、教える者は
良心を持つ、胸をはさ、笑え、と自分に

言いました。母と姑の問題はそれから始まりました。……
今は相手もおとなになりました」と会場を笑わせたり
メモ一つ見るだけでなく、演壇のまわりをマイク片手にあち
廻りまわらうピクと一分の差もなく予定の時間を終うれ
たのにも又感心しました。

「第二部 パネル討議」に参考とす

討議の議題は「新しい男女共同社会の実現（おひき）」
四人の講師の方々の発題にフッて印象に残る部分をま
ずとり上げまはう。

「自己中心、平等な男世のあり方は顔分のとり合ひでなく
共に生ずるといふ共生関係が大切である。今、この商品が
氷水の中におぼれずに平等、自立が出来るか？ 自分のも
の、それは農業との結合による手造りの自立した生産という
とする。初手が違ひで、妻だけがなく、夫も子供も参加
出来る。議論してより参加する。そのうちに家庭に
かえり来るのだ。地域の中、下請けがなく、やりた事もやま

ジョーの女がうつり、これでもおもしろい子だ、と語ると、
 女の主体性のない、生ずる方、自分も活躍して、と、錯覚
 その状況をやさしくする周囲に似た、新聞記事など、
 もそれを讃美し、書かれて、女性が主体的に生ずる
 事を助長する社会環境を作る、(また、)
 「女」す、男らしさ、のフ、パネン、を、かえる必要、がある
 男も女も、い、ま、ま、ある、必要、がある、男女平等の社会を
 作る、のは、人間、く、く、生ずる、世、の中、を、創、る、と、う、事、だ、と
 「家庭がもう一度、若生、地域との統一」となる、具体的、社会的
 場面を、みる、その為の作草は、今、お、女、性、が、先、行、と、する
 その、に、つ、に、も、親、子、供、の、家、事、参、加、を、母、が、お、ち、ん、と、し、て、する
 べ、く、だ、と、

現代は形式のもの（人）を判断する時代、それはない中世は百姓は——男は——の時代、男の生ず方、女の生ず方とがまず、人間の可能性にせよ、可能性を問われるのが現代、舊日本は法律とは男、女同權がさまつてゐる。それを阻害してゐるのが、利潤を優先する資本主義の経済体制だといふ。法律は又その利潤をも規制してゐる。利潤のために基本的人權を奪ふはなうぬと明記とある。私達が真剣にならば、救済の道はあるのだ。真剣にならうとつてゐるのではない社会だから、男、女平等を叫ばねばなうぬ

いやあ、どうせんか。それに比べて結城さんちの彼は遅れ
てます。事はほほ、たい限りをこえてます。

より引く時のまちがえてしまひました
算四十八号となりました。ごめんねさい
ゴとナカイ
今更を通

より引く時のまちがえてしまひました
算四十八号となりました。ごめんねさい
ゴとナカイ
今更を通